



阿久根 賢一



四代目 桂春團治 師匠



## お客様に喜んでいただくことが第一。 それは噺家もフェローの方も同じです。(春團治師匠)

**阿久根** 認知症は不思議なことに、新しい記憶から失われていくんです。自分の年齢は忘れても、生まれた年は忘れないとか。女性の方は結婚して名前が変わっても、旧姓は覚えていることもあります。新しい記憶から失って行って、古い記憶が残ることが一般的ですね。

**春團治** お世話をする人も、喜びを感じておられると思うんです。たとえば、晩年の米朝師匠は噺家の名前も、自分の息子さんが新しく襲名された名前もはっきりしなくなっていました。だけどその時に僕の顔を見て、「おいスケ、来てたんか。」と仰られたんです。僕の以前の名前は春之助(1968~93年。93~2018年は春之輔)で、通称がスケなんです。「おいスケ、来てたんか。」と師匠に言ってもらえて、どれだけ嬉しかったか。お世話している方々は、ぜひともこんなところに喜びを見出していきたい。そう、願います。

**阿久根** 本当に、そうです。私たち豊泉家のフェローたちは、時には俳優業みたいなどころがあるんです。それはなにかというと、認知症の方のなかには、ご自身の世界で生きておられる方がいるんですよ。たとえば今日は2020年の8月と言ってもわかっておらず、昭和50年を生きておられる方や、昭和30年代に戻っておられる方もいます。

**春團治** そうなんですか。

**阿久根** ある程度のヒントを与えて、今日は2020年だったと思い出してくれたらいいんですけど、思い出せない方には、私たちがその方の世界に入っていくといけません。認知症になったある方の世界では、ご自身は今でも現役当時の飲食業のオーナーなんです。その方にとって私たちフェローは、ひとりでは自分が可愛がっている部下で、もうひとはデキの悪い部下。さらにもうひとは、お得意さんに見えているようで、それぞれに対して話し方が違うんです。我々はそれを見極めて、自分が部下であれば、部下を演じながらケアをしていく。今は現場で、こんなことをやっているんです。

**春團治** それは、誠にありがたいことですね。ケアワーカー、豊泉家ではフェローとされる方々のお仕事は、大変なことやと思います。僕は介護士になりたいと思われた時点で、敬意を表します。自分の親や兄弟の面倒を見るのも大変なのに、それを仕事とはいえ、他人のお世話をされる。僕はホンマに、敬意を表します。

**阿久根** やっぱり、嫌々では出来ません。好きだからこそ、出来るんですよ。とはいえ、認知症になった方をケアするのは、真面目に受け止めすぎてもしんどくなってしまいます。上手く肩の力を抜きながら、目の前で起こっていることを、どう受け止めていくか。熱心にケアをされているご家族もいらっしゃいますが、力を入れすぎるとお世話する側も、される側も疲れ切ります。いかに目の前にあることを受け止め、そこから状況をどう展開していくか。そうするとお互いが楽に、気持ちも豊かに生活ができるんですよ。

**春團治** それは、我々の心得と同じなんです。つまり、お客様の表情が大事である。お客様に喜んでいただくことが第一。いくらオレは名人や、上手やと言っても響かないんです。そういう点では、共通項やと思います。噺家もフェローの方も、相手の反応が気になるというところで。

**阿久根** 仰る通りです。私たちは相手の世界観に合わせてケアをするのですが、まさに師匠が仰ったように相手の反応や表情、目を見ながら、これは喜んでいるな、これは嫌がっているなということを見ながら、その方に合ったケアを組み立てていくんです。シナリオがない状態で演じながら、相手の世界観を見ながらやっていくのが、認知症に携わるケアワーカーの仕事。テクニックは必要ですが、やりがいがあるんです。

**春團治** これは話を合わせるようですが、僕は落語は情やと思っているんです。人情の情ね。そこには互いに、共通項がありますよね。僕らの世界には、「芸は人なり」という言葉があります。ウチの師匠もかねがね、「落語は人間性や。」と言っていました。東京の先人で、大変お偉い噺家の方も「了見の悪いヤツは、噺家になってはいけません。そんなのが落語をやると、芸も汚い。」と言っていました。こんなことを改めて言うのは恥ずかしいことかもしれませんが、やっぱり芸事にも仕事にも、真心を込めるのが大事やと思います。

**阿久根** まさに師匠が仰るように、私たちはサービスの質は、フェローの質だと思っています。いくらライセンスがあっても、そこに心がなければ、絶対に良いケアは出来ません。心のある人間がトレーニングをしていってこそ、良いケアが出来るんです。偉大な師匠に向かって失礼ですが、本当に我々と通じるものがあると思います。

**春團治** ホンマですね。今初めて、気が付きました。共通項は、真心ですね。

**阿久根** そうですね。でもプロって、そこなのかもしれません。

**春團治** それが商売だからと言って終わらせるのではなく、僕らで言えば落語に対しては、真心を込めて噺をする姿勢を崩さない。それを今さらながら、自分に言い聞かせています。

**阿久根** やっぱり、噺家も落語が好きじゃないとダメですし、それを通じて相手を喜ばそうという思いですよ。介護も、介護が好きで、認知症を持たれている方を大事に思わないとダメなんです。落語と同じで相手を幸せにしたいというところに、相通するものがあるんだなと思います。